

教科書は友達

大阪府 大阪市聖賢小学校 4年

曾我 綸

「りん、ちょっとかたづけるの手伝って。」と祖父の家で母によばれた。二階へあがると、母が押し入れからダンボールの箱を出して来た。開けてみると、ほこりっぽくて、ツーンとしたかびくさいにおいといっしょに、母の子供のころのおもちゃや絵本、教科書が出て来た。「なつかしいなあ。」と、母は目を細めてパラパラと教科書をめくった。教科書のまわりは少し茶色っぽくなっていて、角もボロボロ。「きたないなあ。」と思いながら、私もその教科書を手に取った。子供の字で書きこみがしてある。落書きも見つけた。私は、子供のころの母に出会った気がして、なんだか不思議な気持ちになった。母の教科書は、私の教科書とちがって絵も写真も少なくて古い。まるで博物館のてん示品みたいだ。大人の母には、もう必要ない物なのに母は、まるで宝物を見つけた子供みたいに、きらきらした目をして楽しそうに子供のころの話をした。そんな母を見て、私はうらやましく思った。

家に帰って、私も教科書を開いてみた。私の教科書にも、書きこみや赤い線が引いてあった。落書きもあった。母といっしょだと何だかうれしくなった。自分の教科書を見ていたら、たった数年前の事が、すごく昔の事のように思えた。生まれて初めてもらった教科書。自分がお姉さんになったみたいで、うれしかった。初めて手を挙げて発表をした日。きんちょうしたけど、先生にほめてもらえた。ひらがなを習った日、かけ算が出来るようになった日など、教科書をめくるたびに色々な思い出があふれてきた。母の様に、たくさんの思い出ではないけれど、私にも色々な思い出があったんだと、びっくりした。今までの私は、教科書は学ぶための道具にすぎないと思っていた。でも、教科書には知しきだけでなく、私のたくさんの思い出や、成長のあかしがつまっていた事を実感した。

以前、すみで黒くぬりつぶされた戦争のころの教科書を見たことがある。私の教科書の書きこみや落書きとはちがう、自由に学べなかった時代。とても悲しい気持ちになった。また、私の様に無償で教科書がもらえない国もたくさんある。一冊の教科書を皆でまわし読みをして学んでいる人もいる事を知っておどろいた。改めて考えてみると私はなんてめぐまれているんだろう。毎年新しくてきれいな教科書を当たり前のようにもらっていた事がはずかしくなった。これからは、今まで以上に教科書を大切に使い、感しゃして学んでいこうと思う。そして、私が使い終った教科書は、私が学んだあかしであり、私の成長の一部だ。私も、母の様に教科書を大切にし、がんばって勉強をして大人になった時、むねをはって自分の子供達に、「教科書は宝物だ。」と話してあげられる様な大人になりたい。私にとって教科書は友達だ。今日も学校へ通う私の背中で、カタカタと教科書が笑っている。